

北陸大学ライブラリーセンター報

Bulletin NO.15

⇒をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 第2回北陸大学読書感想文コンクール <入賞者12名を表彰>

⇒ 表彰式挨拶

北野 与一
(ライブラリーセンター長)

⇒ 最優秀賞 「上善如水」

谷川 智昭
(法学部 法律学科 3年次生)

⇒ 優秀賞 「ゲーテとの語らい」

金井 宏一
(外国語学部 英米語学科 4年次生)

⇒ 優秀賞 「理性とエゴの対立」

百万 友輝
(外国語学部 英米語学科 4年次生)

⇒ 優秀賞 「阿Q正伝」を読んで

徐 小 曼
(外国語学部 英米語学科 3年次生)

⇒ 優秀賞 『五体不満足』を読んで

下出 崇史
(法学部 政治学科 2年次生)

⇒ 優秀賞 『唐詩物語』を読んで

範 亜 維
(法学部 法律学科 3年次生)

⇒ 知の宝庫、ライブラリー

田邊 良和
(ライブラリーセンター)

⇒ 特別寄贈・編集後記

HOKURIKU UNIVERSITY LIBRARY CENTER

北陸大学ライブラリーセンター報
1st-Half 2003



第2回北陸大学読書感想文コンクール 入賞者12名を表彰

昨年度、北陸大学学生を対象にした第2回「北陸大学読書感想文コンクール」を実施しました。締め切りの10月末日までに58点の応募があり、延べ3回にわたる厳正な審査を行いました。審査には、鉢野正樹外国語学部教授（学術資料部長・審査委員長）、紺谷仁薬学部教授、王涵外国語学部教授、松井祐子法学部教授の4氏があたり、審査の結果、次のとおり最優秀賞1点・優秀賞5点・佳作6点を入賞と決定し、2月12日（水）午後12時45分からライブラリーセンターで表彰式を行い、入賞者に賞状と副賞が渡されました。また、応募者の皆さんには、参加賞（図書カード）を後日お渡ししました。

入賞作品

📖 最優秀賞

「上善如水」

谷川 智昭（法学部 法律学科 3年次生）

📖 優秀賞

「ゲーテとの語らい」

金井 宏一（外国語学部 英米語学科 4年次生）

「理性とエゴの対立」

百万 友輝（外国語学部 英米語学科 4年次生）

「阿Q正伝」を読んで

徐 小 曼（外国語学部 英米語学科 3年次生）

『五体不満足』を読んで

下出 崇史（法学部 政治学科 2年次生）

『唐詩物語』を読んで

範 亜 維（法学部 法律学科 3年次生）

📖 佳作

「私は醜悪な人間社会で生きている」

曹 広 平（外国語学部 英米語学科 3年次生）

『洪秀全 ユートピアを目指して』を読んで

田辺 聡彦（外国語学部 中国語学科 4年次生）

「みんなとわかちあいたい」

林 佳 氷（外国語学部 中国語学科 3年次生）

『中国人口超大国のゆくえ』を読んで

川俣千夏子（外国語学部 中国語学科 2年次生）

「刺青の上にいる人生が教えてくれるもの」

竹中 邦枝（法学部 法律学科 2年次生）

（だからあなたも生き抜いて）

「エロスとプシュケーの話からわかる

西村 笑加（法学部 法律学科 1年次生）

古代ギリシャ人が考えていた人間

という存在の性質」

薬学部分館の開館日等の変更について（お知らせ）

1. 平成15年4月1日より、薬学部分館は土・日・祝日も開館します。

2. 開館時間は、次のとおりです。

月曜～金曜日：9:00～19:00 土曜・日曜・祝日：9:00～17:00 夏・冬・春季休業中：9:00～17:00

3. 休館日は、12月31日と1月1日の2日間のみとします。

* 皆様のより一層のご利用をお待ちいたします。

表彰式挨拶

ライブラリーセンター長 北野 与一

入賞された皆さん、このたびはおめでとうございます。

前回の表彰式でも申し上げましたが、この読書感想文コンクールの開催の趣旨は、本学のライブラリーを活用する学生諸君の読書欲を刺激し、知力や考える力などの一層の向上に役立てようとするものです。

皆さんは、われわれのこうした趣旨に賛同され、立派な感想文を出され、見事に入賞されました。主催したライブラリーの職員は勿論のこと、後援していただいた学術資料委員会の先生方も大変喜んでおり、応募された皆さんに心から敬意を表する次第です。

若い人たちが本をあまり読まなくなると言われてから久しいが、こうした年上の人たちの言葉は、自分たちが「若いときにたくさんの本を読んでおけばよかった」という述懐や後悔の言葉でもあります。

学生時代には、感性や好奇心、あるいは柔軟な思考力や創造力が一段と高揚します。この時代に読書に励めば、その後の人生に大きな実りをもたらすことは必然です。どうか、益々読書の機会をつくり、さらなる自己研さんに努めてください。

なお、優秀賞までの作品は、「ライブラリーセンター報」に掲載しますので、あらかじめご了承のほど、お願いいたします。

終わりに、次回も応募されますことをお願いし、お礼とお祝いの言葉にかえさせていただきます。



(北野ライブラリーセンター長 挨拶)



(鉢野学術資料部長・審査委員長 講評)

最優秀賞

「上善如水」

谷川 智昭



書名 老子・莊子（上）新釈漢文大系 7

著者 山本 敏夫・阿部 吉雄 他

出版社 明治書院

私が『老子』を読んで最初に感じたことは、難しい、の一言である。一通り読んでみても自分の心中に残るものがない。読んでいる間はわかったような幻惑の中にいたのだが、読み終わってみると、もやもやしたものは残るのであるが、その正体がわからない。手で水をつかむ様なものである。つかんだつもりでも次の瞬間には手にほとんど何も残ってはいない。『老子』は変幻自在といえる。が、手に残ったほんのひとかけらをよく見てみると、それはまた変わった色に見えてくる。それは光を受けることで、七色に反射するのである。

『老子』という中国古典の中に「上善は水の如し」という有名な言葉がある。最上の善とは水のようなものである、というのである。私が『老子』を読んで最も印象深く、またこれまでの自分と違った価値観を学んだのがこの言葉であった。

『老子』はこの後、「水は万物に利益を与えながら他と争うことがない。そして皆が嫌がる低い場所にいる。それゆえ道に近い存在と言えるのである。」と続ける。私は日常生活の中で他人よりも高い場所に登ることばかりを考えてきたように思う。自分を少しでも大きく見せ、周りの人々より自分がより高く登ることで優越感を味わうことを目的として生きてきたのではないかと考えさせられた。『老子』に言わせれば「つまだつ者は立たず」ということになる。つま先立って立つ者はそのまま長く立ち続けることはできない。いくら大きく見せていても、いつかは無理が生じる。「曲なれば則ち全し」。曲がっているからこそ伸びることができるのであり、伸びようとするのであればまず曲がらねばならない。つま先立って高く跳ぶことは不可能であるが、膝を曲げ身を縮めることで高く跳ぶことができる。自分は何でも知っているのだ、というふりをしてみても進歩はない。自分は知らないと認めた上で頭を下げることで人に教えてもらえるのである。私たちは物事を何でも知っているというふりをしてはいないだろうか。

物事を知る、ということはどういうことか。ただ知識を得ただけで物事を知ったとは言えない。物事を知るということはその本質を知り、またそれを通して自分を知る、ということではないか。私たちは単に知識を得ただけでその物事を知っているというが、本当は知らないのである。なぜならその得た知識を生活の中で生かせず、またその知識が正しいか否かも判断できない。日本は学歴社会と言われ、今もなお続いているが、最近それが崩れ始めた感がある。なぜか。受験戦争などといって単に知識を詰め込んだ人が大量に造られ、真に物事を知った人がいなくなったためではなからうか。そのため日本に進歩がなくなったばかりか、他人や自分を知らないことから道徳の低下が起ったのではないか。このようにその本質は何か、そこから自分というものをどう考えるか、といったところまで考えねば知ったとはいえない。そう考えてみれば、私が『老子』を読んで、難しい、と感じたのはただ知ろうとし過ぎたからではないか、と思

う。

『老子』は無為自然を説く。「無」という行為を認めているのである。私たちは何かをするかしないか、何かが有るのか無いのか、という点で物事を見ることが多い。しかし何もしないという行為が意味のあるものである、ということは確かにある。例えば言葉を考えてみるとよい。言葉というものは思ったこと全てを正確に表現できるものではない。人は、その時の相手の雰囲気や行動といったものからも相手の言いたいことを感じ取る。無言の言葉を読み取っているのである。また、相手に考えてもらうためにわざと言葉に出さない言葉もある。言葉に出せば軽いものになってしまうが、無言の言葉には重み加わる。『老子』はそのような思想を土壌としつつ書かれている。このような無言の言葉があちらこちらに散りばめられていると考えたほうがよい。だから私が二、三回これに目を通したからといって理解できるはずはなく、本当に読んだとはいえないのである。

私はこれから一生かけて『老子』を読んでいくことになると思う。が、その過程で何度もつまずき、立ち止まることになるであろう。しかしそれはいつでも前進の為のものであり、「有」を生ずる為の「無」でありたい。そして上へ昇ってゆくためにも、下へ下へと流れる水のようにありたい。



寄贈図書

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。ありがとうございました。

著者	書名	寄贈者
劉 園英	食養生の知恵	劉 園英（薬学部講師）
Daniel Yergin and Joseph Stanislaw	The Commanding heights [Rev. and updated ed.]	叶 秋男（法学部教授）
William J. Baumol	The free-market innovation machine	叶 秋男（法学部教授）
Brink Lindsey	Against the dead hand	叶 秋男（法学部教授）
ベルント・シラー (田村光彰・中村哲夫 訳)	ユダヤ人を救った外交官 ラウル・ワレンバーク	田村 光彰（法学部教授）



優秀賞

「ゲーテとの語らい」

金井 宏一



書名 若きウェルテルの悩み

著者 ゲーテ 訳：斎藤 栄治

出版社 講談社

「誰でも生涯に一度は、この本がまるで自分ひとりのために書かれたように思われる時期を持ってないとしたら、惨めなことだろう。」ゲーテより

今まさに熱い恋をしている人には共感を持って、まだ本当の恋をしたことのない人には、いつか来るその日に思いを寄せて、読んでほしい。

この作品は、ゲーテ自身の経験を、主人公ウェルテルに重ねています。作品の中で、ウェルテルが恋焦がれているロッテは、実際ゲーテ自身が思いを寄せた女性をモデルにしています。ドイツのヴェッツラーが舞台であり、今なお、ヴェッツラーでゲーテゆかりの場所は、そのままの形で残っています。何百年たっても、ゲーテを、そしてゲーテの作品を愛し続ける、ドイツの人の気持ちは変わらないという事でしょう。小説の発刊は、1774年9月。フランス革命が勃発する15年前。ゲーテ25歳でした。

あらすじを簡単に紹介してみます。繊細で教養豊かな青年ウェルテルが、乙女ロッテと出会い、激しい恋心を抱きます。しかしロッテにはすでに婚約者がいました。ウェルテルは激しく悩みます。

それに加えて、職場での上司との衝突、社交界での身分差別の屈辱など、青春の葛藤は幾重にも重なります。やがて、ロッテが結婚し、彼は失意のどん底に落とされます。

そして、彼は自分の感情を抑えられないままに、夫の不在中に彼女に会いに行き、自分の思いを告白します。しかし、彼女の心は揺れるものの、彼を受け入れることはできません。彼は最後の別れを告げ、翌日の夜十二時に、ピストル自殺を遂げます。

私は、気取らず、つくろわないゲーテの感情表現に引き込まれ、気がつくと一緒に、ウェルテルの恋を応援していました。

誰もが直面する恋や仕事の悩みに、青年らしく、真正面からぶつかっていくウェルテルの姿勢、些細なすれ違いに、心が揺さぶられてしまう繊細さ、ロッテもきっと自分に想いを寄せていると確信して喜ぶウェルテル。めまぐるしく変わる気持ちの描写が、実にリアルで、ウェルテルと読者の距離は、読むほどに近づいていきます。「この本を友達としてほしい。」そうゲーテは冒頭で語っています。「その気持ちわかる」と、つい心の中でつぶやいてしまうような、そんな「共感」が詰まっている一冊です。

「若きウェルテルの悩み」は早速、各国で翻訳されました。そして、イタリアでは、すぐに一冊残らず売り切れました。しかし、なんとそれは、民衆を見下してきた聖職者たちが、「ウェルテル」は悪書であるとして、一般の人々の目に入らないように、買い占めたのでした。

しかし、町の人々は、「ウェルテル」に共感していった。ゲーテは庶民一人ひとりが、笑い、泣き、怒り、悩み、喜ぶ、そうした生活こそが小説であり、詩であると考えていました。

ゲーテは自分が感じたままを書きました。一切の飾り気もありませんでした。それは民衆一人ひとりが感じていることと全く変わりませんでした。人々の共感はたちまち広がっていきました。

「ウェルテル」に寄せてゲーテは語っています。「私は生きた。愛した。ひどく悩んだ。それがあの小説だ。」

これまで、「若きウェルテルの悩み」について書いてきましたが、この本を読み返す中で思ったことがあります。それは、ゲーテは挑戦する人だということです。この本は、親友ウィルヘルムへの手紙という形式で書かれています。それは、今までの形式や規則にとらわれるのではなく、伸び伸びと自分を表現したいという気持ちのあらわれだと思います。

私は、ウェルテルのように、青年らしく、情熱を燃え上がらせて、恋愛に勉強に真正面から挑んでいこうと思います。そして、ゲーテのような、人間味のある、温かい人になっていこうと思います。

終わりに、私の大好きなゲーテの詩を贈ります。

わたしは、一個の人間だった。それは、

すなわち、戦士、ということだ。

平成14年度におけるライブラリーセンター図書の利用の多かった院生・学生の皆さんを発表・公示

標記に係る皆さん、本館21名、分館10名をライブラリーセンター内で発表・公示しました。平成15年度もより一層のライブラリーセンターのご利用を期待しております。

審査委員から一言

薬学部教授
紺谷 仁

昨年審査員をして『もの食う人びと』とその作家辺見庸を教えてもらった。それがなければ彼の近刊『永遠の不服従のために』を求めて読むことはなかっただろう。一冊の本との出会いは連鎖を付けてくれる。今年私にも読める大江健三郎『自分の木の下で』を教えていただいた。優しく語りかける問いかけに、納得させられる深い解が付いている。私にとって難解な大江『作品』をこれから読めると思えない。それだけに新鮮な出会いだった。参加作品中、留学生範亜維さんの読書力とそれを日本語で表現する能力の高さに感服させられた。薬学部の諸君、講義と実習に追われる日々かもしれない。少し時間を作って文学に触れたら良い。隣の学部の学生が読んで感銘を受けた本の中に、君たちの心の琴線に触れるものがあるだろう。活字を追って読んで自分で考える。これは何時の時代にも大切なことだと思う。誰かに言われたままにではなく、主体性を持って生きていくために。これは『自分の木の下で』の中で、うわさへの抵抗力をつける方にも書いてあるが。

優秀賞

「理性とエゴの対立」

百万 友輝



書名 『こゝろ』

著者 夏目 漱石

出版社 角川書店

漱石との出会いは『こゝろ』だった。抜粋ではあったが、高校の教科書に教材として取り上げられていたからだ。近代文学の中では比較的平易で読みやすいその文体と、丁寧に描かれた登場人物の心理描写に惹かれ、私はそれから漱石の作品を一通り読んだ。いずれも感じ入るもの、考えさせられることが多く、その自分なりの考察を国語教諭と語り合ったこともある。しかしながらどの作品も、『こゝろ』以上に私に感銘を与えることはできなかった。理性と、自我の奥深くに潜むエゴイズムの対立。もちろん高々十数年生きてだけの女子高生にはその本質を体感することなどできはしなかった。しかし、だからこそそのすさまじさが衝撃だったのだ。

些細なきっかけから「先生」に出会った大学生の「私」は、その思想と人間性に惹かれ彼のもとへ足繁く通うようになる。世間の目を逃れるようにひっそり妻と2人で暮らす「先生」には、人には言えない過去があった。交際が深まるにつれ、「私」はその過去を打ち明けられる相手であると認められるようになる。父親が死期を迎えたため故郷に帰省していた「私」に、「先生」から過去のことを記した分厚い封書が届いた。「先生」がまだ学生だった頃、Kという親しい友人がいた。そのKの恋する相手が、自分も思いを寄せる下宿先のお嬢さんであるということを知り動揺した「先生」。自分の気持ちをKに伝えず、彼を出し抜くような形でお嬢さんの親に結婚をしたい旨を申し出る。結婚は認められ、Kにはその事後報告だけが伝えられる。すぐに激しい後悔にさいなまれた「先生」はKに詫びようとするが、Kは自殺をする。そして時が過ぎ、手紙によって「私」にこのことを告白した「先生」も自らその命を絶ってしまう。

『こゝろ』は「先生と私」、「両親と私」、「先生と遺書」の3部からなる。しかしこの物語の中核をなすテーマ、人間のエゴを描いた最も重要な章が「先生と遺書」であるのは明らかである。だからと言って先の2部が飾りであるというわけではない。なぜこの作品は3部でなければならなかったのか。文学的な意味合いなど私には分からないが、私にとってこの2部は、私が「私」になるために必要だった。無知で、真面目であるがゆえに先生を慕い、真実を求めた「私」。この「私」と同化することで、先生の遺書はただの自伝から人間の本質を語った真実になるのだ。

自分のエゴが、Kを殺した。エゴと理性の戦いは一瞬の間隙をついてエゴが勝利する。しかしすぐに理性は立ち上がり、自責の念となって「先生」を苦しめる。どのように生きれば、自分のエゴで他の人間を傷つけることなく、不幸にすることなく生きられるのか。苦しみ、考え抜いた結果の隠遁生活だったのだろうか。世間との交渉を絶つことで、それを実行することができる、と。しかし結局「先生」はKの影から逃れることはできなかったのだ。自分がKを死に追いやった事実は変わらない。そして、長い長い苦しみの後に自分も死を選ぶ「先生」。死によって、「先生」は理性とエゴとの戦いに終止符を打つことができた

のだろうか。死によって、「先生」はエゴに打ち勝ったことになるのか、負けたことになるのか。私と、私の中の「私」にはそれはわからない。人間は、愛の前では無力になりエゴを剥き出しにする。実際には日常の中のちょっとした場面でも、人間というものは追い詰められたとき、自分を最優先させてしまうものだ。それは愚かなことだが、人間としてそれなくしては生きていけない。理性とエゴ。その間で葛藤するしかない、それが人間の本質。「先生」は結局「私」以上に真面目な人間であったのだ。その本質と真向から向き合ってしまったとき、彼には死を選ぶことしかできなかったのだろう。

「自己の心を探らえんと欲する人々に、人間の心を探ら得たるこの作物を進む。」岩波書店から『ころ』を出版する際、漱石はこの作品の広告文のために筆をとった。漱石自ら「人間の心を探ら得たる」と評するこの作品は多くの人に人間の理性とエゴの真実を投げかける。人間とはこのように醜いものである。そして人間とは、自分のことである。自分の内面に潜むエゴイズムを否定することはできない。まずはその存在を認めなければ、理性と戦わせることすらできないのだ。

審査委員から一言

外国語学部教授
鉢野正樹

昨年度、第一回「読書感想文コンクール」で好評をいただき、今年も58件という学生諸君のチャレンジのあったことに感謝しています。

審査方法は昨年の審査委員長村上良夫教授のやり方を踏襲し、三段階方式をとり、厳正に、4名の審査委員が必ず一度はみなさんの作品に眼を通しました。内容的に、昨年度よりは良い作品が多く、正直なところ、最終選考では、審査員一同手を焼いた次第であります。最終的には、みなさんが一冊の図書を通じて、如何に、自分の主張を述べているかで判断し、入賞作品を求めさせていただきました。

次回には、更なる研鑽^{さん}を積み重ね、立派な感想文が提出されますことを期待しています。

法学部教授
松井祐子

人生において様々なヒト・モノ・コトとの出会いがある。もちろん、それらと“出会った”と感じるには、自分にある種の求める気持ちと柔軟な感性が不可欠ではあるが。

出会いの中で、とりわけ読書には、時空を超えた数多の未知なる筆者と出会える楽しみがある。偶然に、あるいは必然的に一冊の書物を手にする時、私はいつもその筆者との出会いに心がときめく。いつでも、どこでも、書物ほど、自分のわがままに付き合ってくれる良き友はいない。一冊の書物からなにを読み取るか、あるいはどう感じ取るのかは、自分次第である。著者のことばを通して“私”を読み取る。あるいは新たな世界へと飛翔する。

今回入賞した作品には、先述した「自己との確かな出会い」をしたと感じ取ることができるものが幾つか見られた。この読書感想文コンクールが青年期教育における重要発達課題である自己主体性確立の契機となる読書の機会を学生諸子に提供できたことは、望外の喜びである。

優秀賞

「阿Q正伝」を読んで

徐小曼



書名 魯迅全集第二巻

著者 魯迅 訳(代表): 丸山 昇

出版社 学習研究社

古人の言に「『出師の表』を読みて涙下らざる者は、忠臣にあらず、『陳情の表』を読みて涙下らざる者は、孝子にあらず」とあります。これにならって、「『阿Q正伝』を読みて、天を仰いで号泣し、国民の、人のなすがままに任せ、ついには自らの首を他人の鑑賞に供するにいたるを哭かざる者は、志士にあらず」と言うこともできましょう。

私は、『阿Q正伝』を読むと、魯迅が最も深い影響を受けたところの、ゴゴリの『死せる魂』における挿話を思い出します。ゴゴリがこの第一章をプーシキンの前で朗読したとき、初めはその滑稽さに笑っていたプーシキンが、読み終わるや、「ああ、我々のロシアは何という悲しい国だろう!」と叫んだといひます。魯迅の『阿Q正伝』もおそらく読者の私に、「ああ、我々の中国は……」という、同様の感慨をもたらしました。

魯迅の阿Qは、単に一人の人物、一つの時代を描いているだけでなく、一つの歴史、一つの民族の巨大な典型を飾りあげたものと言えましょう。この阿Qという芸術的の典型の中に、私たちは、歴史的、民族的、さらには、人類社会に階級と階級闘争が存在して以来の、人間の肉体と魂に刻まれた深い深い傷跡を見出さずにはおられません。

阿Qは、単に憐れむべき存在であるにとどまらず、体中に刻まれた傷跡を、私たちにさらしてみせます。それは、阿Qの体に刻まれているだけでなく、私たちが色々な所で会う人たち、さらに私たち自身にも、多かれ少なかれ、くっきりと刻まれているのです。それは、今もうずいて、私たちに憂鬱にさせ、この歴史的、民族的、つまりは人類の階級社会が人々に与えた運命が、いかに残酷であるかを思い知らせてくれます。そして、私たちに深く考えるよう教え、啓発し、戦うほかに別の道はありえないと私たちに奮闘を呼びかけるのです。阿Qは革命をしようとしたのです。たとえ、最後は悲劇的な結末を迎えるしかなかったとしても、いや、それは結末ではなく、一つの始まりであったと言うべきでしょう。やがて、何千万という阿Qが次々と出現し、かくて新しい時代が到来したのです。

中国の辛亥革命は、形の上では日本の明治維新より一歩進んでいました。それは「共和」を実現したからであります。しかし、ブルジョア革命の徹底性という点では、日本の明治維新に及びませんでした。二千年以上の封建思想はすでに人間の意識を支配し、たとえ新しい政権が封建制度を廃止しようとしても失敗を見ざる得ませんでした。その結果が、その時代のあのような状況をもたらしたことを我々は今、痛感しています。

阿Qは時空を越えて革命の中に生きています。中国が革命したならば、阿Qも革命できるのです。阿Qは中国革命の原火であり、阿Qは何千人、何万人、何千万人の原火の形象なのです。中国人の思想は二千

年以上の封建教育で閉鎖され、新しいものは一切納得することができず、孔子以後、孟子を経て、現代における魯迅、毛沢東に至るまで、思想的創造を行った中国史上の碩学たちは、みずから意識するしないにかかわらず、すべてこの孔子によって作り出された文化心理に支えられて、それまでの古い文化を批判し、新たな文化革新を行ったと考えるのです。現在の中国が改革と近代化を目指す際、そこで要求される文化的な再生や革新が国家の上からの強制や、国際世界の外部的圧力によって推進されるときにはじめて本格化するものであり、そのためには伝統文化を全面否定するのではなく、むしろその中にある内発的な契機に頼ることが必要です。

まさに、かつて一九二〇年代に魯迅が中国の国民性における奴隷的精神として「阿Q」精神と呼んだものが、随処に見られるようになってきました。民衆自分自身もそうした革新に踏み出す力をもたない、あきらめと絶望が支配しています。こうした絶望の中で、彼ら自身が他人の弱みにつけこんで悪徳を働く「阿Q」に成り下がっていくことを許してもいたのです。民衆の「阿Q」的なありようは、改革開放政策の展開とともに二十年、顕著に拡大してきました。改革開放政策はいわば「蓄積」重視の伝統文化を「流動」重視の文化に転換しようとする試みといつてよい。この転換がスムーズに進まない状況下に、まさに大量の「阿Q」的なものが生み出されてくるわけです。そこではむしろ、伝統文化の中の積極的な文化の要素、たとえば相互扶助の精神などが発揮できないばかりか、民衆が卑小に見ることでみずから「奴隷化」を迫るような要素が拡大され、その弊害を強める結果になっています。

今日の世界が産業技術や情報の面で、あるいは物的、人的な交流の面で、地球一体化と呼べるような相互浸透性を高めているという認識が存在しています。つまり、近い将来に一体化した地球社会とでも呼べるようなものが登場するとみなしたうえで、中国はそのような地球社会の一員に数えてもらえず、いわば落ちこぼれとなる危険性が高いと考えるわけです。この「落ちこぼれ」の危機を何とかしなければならぬとする使命感こそ、私たち愛国意識にほかなりません。

私は、この阿Qという芸術的典型的の優れている所以は、まさに、私たちの生きている時代と生活を、最も高度に、最も深く集約してみせ、それによって私たちを慨嘆させたり、しん吟させたりするのではなく、私たちを激励し、鼓舞し、発奮させる点にあると思います。

審査委員から一言

外国語学部教授
王 涵

「三日不読書、面目可憎」

中国には「三日不読書、面目可憎」(三日間読書しないと、顔つきが憎たらしくなる)という名言がある。つまり書物は鏡のような存在で、普段の自分の姿を反映する。

私の長い学生時代、読書は大事な日課で、充実かつ懐かしい歳月を送って行っていたが、近年は、本を読む余裕が少なくなってきて、常に自分の顔つきが憎たらしさを感じている。今回読者として、第2回読書感想文コンクールの応募文章を読ませていただき、学生達の純朴な姿や豊かな感受力に、私の心が打たれた。これからまた学生時代に戻り、毎日愛書を読書し、常に明鏡の前で、自分自身の汚れを清潔にしようと思っている。

優秀賞

『五体不満足』を読んで

著者 乙武 洋匡

出版社 講談社

下出 崇史



この本についてまず感じたことは春の青空のようにとても爽やかで、すがすがしいという感情を抱きました。そして、彼の明るさと強さに勇気を貰いました。彼が明るく、強い人に育ったのは、ご両親の育て方によるものだと思います。両親は、彼を家に閉じ込めることなく、みんなに彼の事を知ってもらおうと、いつでも彼を連れ歩き、決して彼の存在を隠してしまうことはしませんでした。彼が強く育ったのは、そのような両親の育て方によるものでもあるが、彼自身がその中で身につけた強い精神力によるものでもあると思いました。普通では彼のようにはいかないし、彼自身のための育て方だとしても、彼の両親がする育て方をできる人はそう多くないだろう。

彼が小学校の時に付き添いとして廊下にずっと待機していたお母さんは、先生の教育方針に一切口出すことはなかったし、彼に対しても必要以上の干渉もしませんでした。周りのみんなが「どうして手がないの?」と聞きにきたり、ビクビクしながらも手や足を触りにきたり、洋服に自分の手足をしまいこんで彼の真似をするような子がでてきたときも、「彼自身で解決すべき、しなければならぬ間」であると目の前で自分の子供が「見せ者」になっているにもかかわらず、平然を装っていました。彼の希望する高校に通うためには、住んでいる所を変える必要があり、車椅子生活に対処することができる場所は限られてくるのだが、それが見つかるかと契約してしまい、「契約したんだから、受かってもらわなくては困る」と言って彼にプレッシャーをかけました。前にも述べたように、このような育て方は彼を強くそして少しでも自由にしてあげることのできるものであると思いますが、実際のところ、両親はどれだけ不安であっただろう。厳しい言葉をかけることにとても抵抗があった時もあっただろう。

待ち合わせの時の挿話。仁義を大事にする人と話し込んだことを報告すると、母は驚くこともなく平然として「ああいう方たちは、ツメるといっても小指一本程度でしょう。あなたなんか、全身ツメちゃってるんだ。それは敬意を表されるわよ」と言っている。

彼が、「旅行に行きたい」と言いだした時には、「自分たち夫婦も旅行に行くことができるから、早めに日にちを教えてほしい」と言って反対もしませんでした。

おおらかで心が大きいというか、ととてもとても驚いてしまいました。このようにはなりませんし、ただ驚いてしまいます。

五年生の時に運動会で初めて100メートル走に参加したことが嬉しいと言っている。今まで参加できなかった理由に「彼をみんなが見ている前で走らせるのはあんまりだ。学校は無神経だ」という一般的な声が上がらないとは限らないという懸念である。大切なのは観客の気持ちではないし、一番大切なのは彼自身がどうしたいかであり、観客が見やすいもの、学校が批判されないようにするためには決してない。それを理解してくれる先生であったことも恵まれていると言えるのかもしれません。

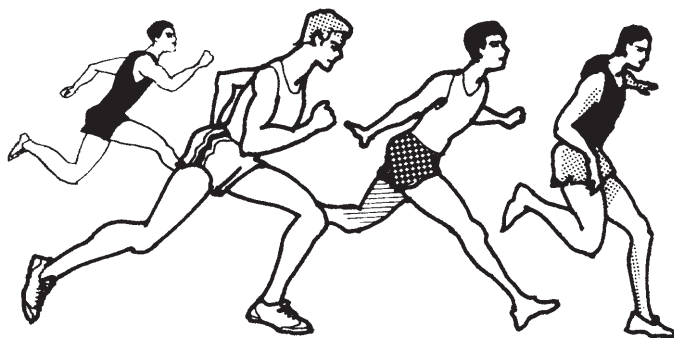
小学校の先生は、「彼の将来を考え、今、どのようなことをしてやるのが本当に必要なのかを考えていくのが自分の役目である」との信念を持ち、厳しくそしてやさしく、工夫がされて、嫌な思いをせず授業に参加できるようにした。クラスメートにも支えられて登山にも参加し、なんと中学ではバスケット部、高校ではアメフト部に所属していた。彼は周りの先生方やクラスメートにも恵まれている。

このようにして育った彼は、大学生になるまで自分が障害者だということを、自覚する必要も機会もなかったと言っている。普通では絶対考えられないことです。

彼が明るく、強く、重い障害を持ちながらもそれを認識することなく生きてこられたのは、周りの環境に恵まれたこともその理由であるが、やはり母が彼に対して初めて抱いた感情が、「驚」「悲」ではなく、「喜」であったこと、両親の強い愛情と決心により彼がこのように大きな人間に成長できたのでしょう。

乙武さんが、「ニュースの森」と「徹子の部屋」に出演しているのを観る機会がありました。自分の想像していた爽やかで、すがすがしい青年でした。この本を書いたのは、「障害を持っていても、楽しい」と思っている人間がいることを、知ってほしいからだと言っていた。この本で教えると言うのではなく、知ってほしいと言う彼の謙虚な自然な言い方にもとても好感を持つことができました。五体満足な自分でも私は彼のような素晴らしい青年にはなれてはいない。

「素敵なお人」と言われる人は、素敵なお生き方をしてきたからだ。見栄えが良くても、高価で綺麗な服を着て、綺麗な靴をはいて、綺麗な車を取り回しても素敵とは言えないし、美しいとは言えない。内面的に素晴らしい人は自然と外面にも現れてくるものだ。だからその人が今までどんな生き方をしてきたのかは自然と外面にでてくるのだ。そういうものであると私は思います。いくら外見を変えても、内面的なことがしっかり外見にはでてくるのです。爽やかで、すがすがしい乙武さんは、やはり、そう思われる生き方をしているのです。五度目の海外旅行に出掛け、スキューバダイビングのライセンスに挑戦するそうだ。失敗や挫折は怖いけれど、それを恐れず「挑戦」していくことにより、自分が今まで見たこともなかった世界が広がっていくし、もしその世界が厳しくつらい世界であったとしても、勇気を出し自分の知らない世界に飛び込むことができることは素晴らしいと思います。失敗などを恐れて小さな世界で人生を送るよりも、失敗したとしても、後悔をして悩んだ時もそれは新しい世界への第一歩だと思うし、その広い世界で人生を送る方が楽しい人生を送れるような気がします。そんな広い世界でも楽しいことや、嬉しいことや楽しいことたくさんあるし、その方が楽しいと思います。失敗して悩んで考えるからこそ人間は成長して行くものであると思いますし、辛く厳しい時があるからこそ、それを乗り越えていくからこそ本当の喜びを知ることができるのではないかと私は思います。



優秀賞

『唐詩物語』を読んで

著者 植木 久行

出版社 大修館書店

範 亜 維



信じられないかもしれないが、中国では子供が漢詩を習うのは、漢字を習う前である。私も例外ではなかった。漢詩を家族またはお客さんの前で流暢に暗唱できればものすごくほめられることがわかっていて、しかし今考えると、漢字さえ習っていないのに、詩の本当の意味はわかるはずがない。わたしにとって、ある意味で大人たちのご機嫌をとる手段でしかなかったであろう。そうはいってもまったくわからないこととはない。例えば、「鋤禾日当午、汗滴禾下土」をおぼえ、米は一粒でも大切にすべきだとわかった。「拳頭望明日、低頭思故郷」を読み、作者はふるさとに愛着をもっていることがわかった。「慈母手中線、游子身上衣」を習い、母親の愛情と恩情に感謝すべきだとわかった。

図書館でのアルバイトがきっかけで、『唐詩物語』という本とめぐり合った。なにげなく本をめくってみると「楓葉夜泊」の詩があった。「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船」(月落ち烏啼いて霜天に満つ、江楓漁火愁眠に対す、蘇州城外の寒山寺、夜半の鐘聲客船に到る)。この詩は小学校で習った。5、6年前、蘇州の寒山寺に行ったとき、この詩の掛け軸を買ったことがあった。なつかしい思いがした。寒冷、静寂、暗闇の夜、さびしいカラスのなき声、点々と燃える漁火、旅人しか聞こえない夜半の鐘聲...、私たちに美しく静かな秋江夜景を描かれた。詩人の孤独感は時代を超えて伝わってきた。子供のときはよくわからなかったが、人生経験を積んだ今では“旅人の哀愁を歌った絶唱”といわれる理由がわかる気がする。寒山寺はこの詩のおかげで全国に広く知られるようになった。多くの人が寒山寺へたずね、名句や名詩を残した。寒山寺は有名な史跡にかわった。詩の中の「寒山寺」の本当の場所について争論する人もいる。そんなことはどうでもよい。この詩の中の寂寞の情懷、寒山寺の夜半鐘聲の趣を共感できるだけで十分である。

唐詩といえば李白である。李白は中国で最高の詩人である。唐の時代、四川に生まれ、25歳のとき故郷を出、当時の都長安など各地を歴遊して、功績を追い求めたが失敗した。李白は科擧の試験を受けていない。すべて詩で有名になった。推薦によって翰林供奉(皇帝に仕える顧問役)として当時の皇帝玄宗に仕えた。しかし、李白の自由奔放の気質と傍若無人な態度は宮廷文人の生活に適應できなかった。詩人李白は特に酒が好きで、「斗酒詩百篇」という言葉がよく知られている。酒と詩が欠かせない李白は詩仙、酒中仙とも呼ばれている。讒言されて長安から離れ、李白は自由気ままに友人と旅し、古跡を訪ね、酒を飲みながら文学を論じた。しかし、放浪のように見えるが、国に報いることができない失意、生活の不安、挫折感李白を苦しめていた。「白髮三千丈、緣愁似個長、不知明鏡里、何處得秋霜」(白髮は三千丈ある、わたしの憂愁は髪と同じ位に長いからだ、知らず知らずのうちに鏡の中にどこからの秋霜に白く染められた)。白い髪は三千丈の長さ、それは李白ならではの奇抜な表現といえる。そのとおり李白は人間を越えた詩の才能で独自の詩風を拓き出し憂愁を詠っていた。「兩岸猿聲啼不盡、輕舟已過萬重山」、当時の権力

争いに巻き込まれた李白が追放される途中で赦免されたときの詩である。何月も獄中で過ごした彼は解放感に歓喜した。長江を下ってゆく途中、耳について離れない野猿の声を聞きながら、乗っている小さな船は万重山をたった。詩人は苦しい体験をしたあとだけに感じた爽快感、解放感が真に迫っている。詩があって、詩人の喜び、憂い、悲しみを抒情することができる。詩人がいたので数え切れない詩が私たちに巨大な文化財産として残された。

「花開不同賞、花落不同悲、欲問相思处、花開花落時」(花が咲いたとき共に楽しむことができない、花が落ちるときにともに悲しむことができない、お互いに思うときはいつかと聞きたければ、花は咲いたり落ちたりするときだ)。これは唐代女性詩人の作品である。恋の詩が多くあるが気に入るのはこの春望の詩である。わたしの友人はいつも愛が時間と空間の制約をこえないものだ感慨する。この詩をよんで彼に聞かせたい。現在まで詩が伝わったいるんなところまで、恋の思いがずっと続いているのではないだろうか。「花開」「花落」を繰り返し使われていたが、煩雑感がない。清冽、単純、女性の生まれつきの無邪気さ、特有の悲しい気持ちは、心の奥までに届き、いっぱい満ちた。淡々として悠長な味わいがある。

一人の時間をつくってお茶を飲みながら詩をよんだ。詩人の物語にはまって、はるか遠いところに旅に連れていかれたようだ。そして静かになった。すがすがしくなった。心が和む時間を過ごすことができた。社会にでて、休まず仕事をいっぱい覚え、死ぬほど疲れたときがあった。人間関係の厳しさを恐れて、やむを得ず自分を曲げたり逃げたりもした。寂しい世界の中に不安を感じながら落ち着かない日々が続いたこともあった。そのとき、なぜ詩を読むことを思い出さなかったのか。幼いころ、人生の素朴な真理は詩から習ったのではないか。青春時代、詩をかり情熱をうたったこともあったのではないか。今の私たちはなぜ詩を忘れたのか。私は恥ずかしく感じた。詩は私たちの生活の一部であると信じる。現実主義が氾濫され、功利ばかりを求める現代社会は何か汚されたのではないだろうか。詩はその汚れからすぐ離れることができる場所にある聖域である。手を伸ばせば届くところにあるが、ただ私たちは見れども見えなかっただけだ。「花より団子」と人は笑いながら言うかもしれないが、花の美しさをわからない人は仮にだんごをおなかいっぱい食べることもできたとしても、かわいそうな人ではないか。詩は、水中の月ではない。鏡中の花ではない。時代を超えて、私たちは詩のめぐみを受けている。詩は人生の良師であり人間の友であり、心を癒す良薬でもある。あなたがあたかも暗黒の中で生きていると感じるなら、詩はあなたに温かく光を発してくれるであろう。あなたが毎日さびしい生活をおくっているのなら、詩は最高の恋人と思えばよいのではないだろうか。



知の宝庫、ライブラリー

ライブラリーセンター 田邊 良和



北陸大学は、昭和50年に「自然を愛し、生命をとうとび、真理を究める人間の形成」を目的とする教育理念を掲げて、薬学部を開設しました。その後、外国語学部、法学部、国際交流室（現国際交流センター）及びオープン大学を開設、国際交流センター及び留学生別科を設置するなど、国際交流を活発に行ない、地域に密着した大学として、日本海側で唯一の私立総合大学へと発展しました。

ライブラリーセンターは、平成5年4月に、通称「クレバーハウス」の呼称で竣工されました。大晦日と元旦を除く363日間開館し、学生もさることながら、開放している地域住民からも、大変喜ばれ、大学の三種の神器である「教育」・「研究」・「社会貢献」に深く寄与しています。また、「クレバーハウス」の書架や机や椅子等は全て木製で作られており、「木の年輪」同様、「知識の年輪」を積み重ねていただきたいと願っています。

昨今、新聞紙上等では「学生の読書離れ」が問題視されていますが、衆知のとおり、健全な肉体や精神をトレーニングし鍛えるためには、体育施設等が活用されます。同じように知力やウエポン「武器（論理力と創造力）」をトレーニングし鍛えるためには、読書が最適であり、必要不可欠であります。ライブラリーセンターは、そのための「知の宝庫」であります。その一環として、本学では、昨年度より、読書感想文コンクールを開催しております。マークシート中心の教育で育った学生の皆さんにとっては、物事を論述することは、不慣れのように見受けられます。従って、学生の皆さんが、一冊の図書をとおり、言葉ではなく、文章として、問題意識を自己表現することは、大変肝要なことと言えましょう。先達も、最初から決して立派だったわけではありません。一例ですが、『孔子』・『老子』等の様々な書物で学び、「知識」等を深め、偉人となったのでないでしょうか？

私自身は、絶えず、新聞・インターネットは言うまでもなく、経済・語学・法律関連の雑誌等にも眼をとしたり、また、休日には書店等を視察し、学生の皆さんの勉学に必要な図書を初め、興味を抱いてくれる新刊本等を「選書」したり等、微力ながらも読書離れに貢献できればと努力しています。

21世紀の大学図書館は、資料が年々データベース化されていくのではないかと思います。本学もその流れには逆らえないでしょう。しかし、情報が氾濫していくこれからは、その情報を、自分自身で取捨選択し、正しい情報を「知識」として培うことが重要になっていくものと考えられます。

最後に、いくら便利な情報化時代となっても、利用者と職員が肌と肌で触れ合う閲覧業務（特にレファレンス）を決して疎かにしてはいけないと思います。この「人と人の触れ合い」を疎かにすると、人間形成を育成する教育機関としての責務が全うできません。本学のライブラリーセンターは、「知の宝庫」を利用する人たちとの「心の触れ合い」を大事にし、これからも読書を愛する人たちに役立つよう取り組んでいく所存であります。

特 別 寄 贈

先般、ライブラリーセンターの本館に、明・清時代を中心とする文学・歴史・政治・民俗関係等の中国の図書類等約2万点のご寄贈を賜りました。

それらは、大変貴重な文献ばかりで、私たちは、教職員の教育と研究は言うまでもなく、学生諸君の勉学に役立つものと期待しており、ここに感謝の意を表する次第です。

なお、寄贈された上記の図書類等を「未名文庫」と名付けました。それは、次の理由からです。

本学の姉妹校である北京大学のキャンパス内には、「未名湖」という大きな湖があります。

北京大学の学生は、この「未名湖」の湖畔を逍遥しながら、先生や友人と語り、あるいは議論をし、互いに啓発しあって自らの人間形成の確立に努めています。

寄贈者の意向に添い、「未名文庫」の「未名」は、この「未名湖」の「未名」を拝借し、名付けたものであります。「未名」には、「今は未だ世に名をはせていない無名の学生たちが、他日、社会に貢献する有意な人材に育って欲しい」という温かい願いが込められています。



本館(4階)に設置された「未名文庫」



編 集 後 記

図書館新システムのご案内

平成15年4月14日より、新図書館システムを導入いたしました。学生・教職員の皆さんには、学内LANを利用しでの検索ができるなどの利便性があります。皆さんのより一層のご利用をお待ちしています。詳細につきましては、ライブラリーセンターまでお尋ねください。

CONTENTS

○ 第2回「北陸大学読書感想文コンクール」 入賞者12名を表彰.....	1
○ 薬学部分館の開館日等の変更について	1
○ 表彰式挨拶	2
○ 最優秀賞感想文	3
○ 寄贈図書	4
○ 優秀賞感想文	5
○ 平成14年度におけるライブラリーセンター図書の 利用の多かった院生・学生の皆さんを発表・公示 ...	6
○ 知の宝庫、ライブラリー	15
○ 特別寄贈	16

北陸大学ライブラリーセンター報
NO.15 1st-Half 2003

平成15年4月18日発行

編集・発行：北陸大学ライブラリーセンター
〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1
TEL . 076-229-3021
FAX 076-229-4850

ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp
北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/

印刷：カンダ印刷株式会社